

シヨウロ・しよろ・松露

村田修子

「きのこ」と自分のかわりを振り返って考えてみたとき、とっさに何も浮かんでこないほどふれ合いは少ない。

山には縁の少ない関東平野の、しかも海に近い土地で育った私にそうなのか、とも思うけれども、本屋の店頭にある、他の種類の図鑑などに比べると非常にその数の少ないことや、周囲のひとたちの話し振りなどからしても、いちがいに私だけのことではないらしいことは感じられる。だから関西で育った義兄から聞いた、「山を買って松たけ狩りをする。」なんていう話は、どう思いをめぐらしてみてもついてはいけない。あの香気ぶんぶんの貴重品の存在の松たけがによきによき立っているのを実際に見たり引き抜く、という経験が

ないので、想像することはできても、実際の感覚として思い出すことはできないからだ。

「きのこ」についての特集をする、ということでも話し合っていたとき、「二三年前に園の山道に生えたきのこを子どもたちが見つけたくらいね……」という雑談から、それを書くように、ということになってきたのだが、それとても、生えていたきのこをお箸ではさみ、ビニール袋の中にまたたく間に入れて得意そうに、また気味悪そうに皆にみせて歩いていたら一日が過ぎると、毎日のようにその遊びができるほどのきのこのほうも続いて生えてくれなかったため、それで終りになってしまい、そのとき図鑑を見ても、実物と、平面的な図や写

真との適合ができず、今だに名前も分らぬまま、になってしまっているのだが、そのとき毒きのこだとか、そうではないとかクラス中で大きわざして山をかけおりたり、ビニールの袋をわり箸を、と要求してかけ上ったりした感じを忘れないでいるらしく、今でもその山の道を通るとき「ここにきのこがたくさんあってとったね」というひとがいる。

去年、秋田の友だちがつとめていた幼稚園の、庭つづきの山で、本当にきのこらしい形をした食用にできるものを教えてもらってとったが、そのとき草や木を分け、その根もとなどを目を皿のようにして探してとる喜びという経験は都会の子どもには望めないことを、前に大きわざしたことと比べてみて大変残念に思った。

こうして「きのこ」のことを考えているうちに、私は大変な経験を持っていることを思い出した。

「きのこ」、というとかさがあって、足(？)があつて……と、その形ばかり考えてしまっていたけれど、私が小さいとき住んでいた町からもう少し海辺近くの郊外にいくと、松林がたくさんにあった。それは防風林でもあり、たくさんといわしを干す、ほしかばであった。

春頃だと思うが、植物好きの叔母といとこの男の子と一緒に

によくその松林に松露をとりにつれていってもらった。

その名の通り松の根もとの土を掘ると、コロリン、と出てくる。そうはいっても掘れば必ず出てくるというほどたくさんあるわけではないので、小さい私たちはいつも退屈して、その周囲に生えているつばなという草の、穂の出るのを集めたりした。今も野にいくとそのつばなが白い穂を出しているのを見掛けることがある。そうすると、またすぐ松露の感じがよみがえってくる。一度珍らしく大きな松露が二つついたのを見つけたことがある。そのときのドキッとした感じは今でも思い起すことができる。とって帰った松露は、ごはん炊き込んで「松露ごはん」となったが、かむとしゃりしゃりという感じで余り好きではなかった。それをよけて味のついたごはんばかりをたべた記憶がある。きっと、大人の味というのだったのだろう。

松露はや 思い出のみの 茸となり

松露を知っているひとは少ない。松露はショウロ・しょうろでなく、やっぱり松露がよい。あの松林で砂を掘り起したり、つばなをとったり、ねころんだり、風の音を聞いたり、そんなことを今私の前にいる子どもたちとできたらなあ、と思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)